

情報学部新カリキュラムの英語

～基礎事項の再検討とESP(特殊目的の英語)～

福島 一人
(文教大学情報学部)

The New English Curriculum for the Information and Communications Faculty ;
Basic English Review Courses and ESP(English for Specific Purpose Courses)

FUKUSHIMA KAZUNDO

(Faculty of Information and Communications, Bunkyo University)

要旨

情報学部では、2003年度から、新カリキュラムの英語授業を行っている。従来では、1年次には、週二日、専門の英語文献を読むための、基礎的読解力の養成を重視したが、現在では、二日のうち一日、読解・作文・会話に関わる文法を中心に基礎事項の再検討にも重点を置いている。2年次には、ESP(特殊目的の英語)関係の科目を含む選択群を設け、従来より専門性・具体性をもたせ、学生の選択の幅を広げている。

はじめに

2003年4月に始まった新カリキュラム(新カリ)では、従来のカリキュラム(旧カリ)の英語の卒業要件総単位数8単位を、6単位とした。旧カリで必修の「英語A(聴解)」に対応する「英語リスニング」が選択となったためである。

情報学部全体のカリキュラムで単位数を減らす、という流れの中で、英語にも単位数を減らすことが要求されたのである。2002年2月の「情報学部カリキュラム検討会」で依頼され、決定するに至った。

特に「英語リスニング」を選択にしたのは、2001年10月の、情報学部教員に対するアンケート結果(2001アンケート)による。(矢口1996)(注1)に述べられている、1991年にやはり教員に対して行なったアンケート(1991アンケート)と同様、2001アンケートでも、4技

能のうち、「読む」の重視を望む声が多かった。しかし、今回は前回よりも、「聞く」「話す」の重視を望む声が多くなった。従って、選択にしたとはいえ、クラス数は、従来と同規模、つまり、広報学科の定員増分を含め、春、秋、各学科2クラス設け、「卒業要件単位を超えて履習した単位は、4単位まで専門選択必修科目の単位に充当できる。」という規定(専門選択科目単位充当規定)を学生に周知させることにした。

従来のカリキュラム(旧カリ)

内容等詳しくは、(矢口1996)を参照されたい。

1年次の英語	
春学期：週2日2単位(必修)	秋学期：週2日2単位(必修)
英語(講読)	英語(講読)

英語 A (聴解)	英語 A (聴解)
英語 A は春学期または秋学期に指定	
2 年 次 の 英 語	
春学期：週2日2単位(選択必修)	秋学期：週2日2単位(選択必修)
英語 B (入門講読)	英語 C (総合英語) 英語 D (上級講読) 英語 E (上級聴解) 英語 F (ライティング) 英語 G (スピーキング)
英語 の成績により、春学期または秋学期に指定	
総単位数 8 単位	

「英語 B」「英語 C」

入学時の「基礎英語テスト」により、各学科共、普通クラス4クラス(旧カリでは広報学科は2クラス)、上級クラス2クラスに分け、指導の効率化をはかった。「英語 B」は「英語 C」のクラスのもちあがり、その内容を発展させたものである。「英語 C」の履修者は「英語 B」の単位取得者、という制限があった。1991アンケートを踏まえ、「辞書を使えば普通程度の専門書を理解できる」読解力を遅くとも卒業までにつけるための基礎的な授業である。

しかし、基礎学力、特に文法知識が乏しく、文の構造の把握ができない学生が近年次第に多くなり、講読に重点を置く授業だけで、はたして読解力の向上につながるのか、という疑問がもたされた。

「英語 A (聴解)」

すべてネイティブスピーカーが担当していた。新カリでも同様である。

会話には、まず「聞く」力が必要、という考えに基づき1年次に設けた。しかし、春、秋、合計4クラス(注2)であったため、1クラスの平均が40名を超えた。1991アンケートに平行することだが、担当者の言葉によると、学生の方も、全体からすると、「聞く」「話す」より「読む」「書く」に興味をもつ学生が多いようであり、この科目を選択した方

がよいのでは、と思われた。

2年次の英語(「英語 B」~「英語 G」)

「英語 B」の成績をもとに、上位約40%には、秋の選択群の1つを選択させ、残りの約60%には、春のクラス指定の「英語 B」を選択させた。「英語 B」は専門英語講読入門的なもので、読解力に心配のある学生に、早く専門分野の英語に親しませることを意図していた。選択群は、約40%の比較的優れた学生に、自分の好きな方向の英語に親しませるので、一種の「浮きこぼれ」対策であった。

しかし、「選択の幅がある」とはいえ、上位の学生に限られ、また、それらの学生の中にも、専門的な「英語 B」の受講を望む声や、「英語 D」「英語 F」に専門性をもたせて欲しい、という声があった。さらに、担当教員からも、「英語 B」担当時(注3)に、「いくら基礎的とはいえ、得意分野でない専門性のある英語を教えるのは無責任」という批判があった。

新カリキュラム(新カリ)

旧カリにおける問題点や反省点を踏まえ、2001年1月からカリキュラムの検討を始め、「情報学部将来構想研究会」や、2001アンケートなどで、英語以外の情報学部専任教員の意見も拝聴し、2003年4月からの新カリキュラムが完成した。

1 年 次 の 英 語	
春学期：週2日2単位(必修)	秋学期：週2日2単位(必修)
英語 (講読・文法)	英語 (講読・文法)
春学期：週2日2単位(選択)	秋学期：週2日2単位(選択)
英語リスニング	英語リスニング
2 年 次 の 英 語	
春学期：週1日1単位(選択必修)	秋学期：週1日1単位(選択必修)
総合英語 A 時事英語 A	総合英語 B 時事英語 B
科学技術英語 A ビジネス英語 A	科学技術英語 B ビジネス英語 B
インターネット英語 A 英語スピーキング A	インターネット英語 B 英語スピーキング B
英米文学講読 A	英米文学講読 B
総単位数 6 単位	

「英語A」「英語B」

習熟度別クラス編成を行なっていることや「英語B」の履習制限があるなど、旧カリと同じ。

しかし、授業内容は、講読だけでなく、基礎事項、特に、読解・作文・会話に関わる文法を中心に基礎事項の再検討にも重点を置くようにした。週2日のうち、1日は講読、1日は文法の再検討を行なうことにした。近年高校では、「英文法」を独立させて教えることをほとんど、あるいは、まったく行なっていない。その意味では、「英語A」「英語B」は、「補習的」あるいは「治療的」要素をもつ、と言えよう。つまり、高校までの基礎事項の復習と専門文献読解の基礎力を養う。

また、上限30名という少人数教育の利点を生かし、講読の授業時に、英語と日本語との比較を行なう、と同時に、正確な日本語の指導も併せて行ない、さらに「日本語による適切な表現能力の向上」にも留意することにした。(注4)ただ、この指導法は、「訳読主義」的要素が強くなると思われるが、諸般の事情を鑑み、敢えて行なうことにした。

「英語リスニング」

旧カリの「英語A」と授業内容は、同じで、全クラス、ネイティブスピーカーが担当する。

選択にしたせいか、受講生は予想を下回った。これは、本年7月に、広報学科の2クラスに試験的に行なった、「あなたが満足すると思われる大学の英語教育はどのようなものですか?」という、記名式、自由回答のアンケート結果に矛盾する。回答では、「会話を重視した授業」という主旨のものが多かった。他の2学科の学生の回答の傾向は異なるかもしれない。選択にしたとはいえ、会話による、コミュニケーション能力の向上も重要なことである。「専門選択科目単位充当規定」を、授業時間等を利用して、さらに周知させるべきであろう。

2年次の英語

「英語スピーキング」は別として、全体としては、専門英語入門的な、旧カリの「英語B」の理念を生かしている。従って、「英語A」の成績によりクラス編成を行なうような習熟度別クラス編成は行なっていない。ESP(特殊目的の英語)関係の授業を加え、専門性、具体性をもたせることにより、学生の様々なニーズに答えるようにした。

「総合英語」

英検、TOEIC等の資格取得を主たる目標とする。

「時事英語」

英字新聞・雑誌を読み、その文体に慣れさせる。時事問題の討論を行なうこともある。

「科学技術英語」

科学技術関係の文書を読むなど。

「ビジネス英語」

ビジネス通信文を読んだり、契約書の英語を書いたりする。

「インターネット英語」

コンピュータリテラシーの高い本学部学生に対して、ネイティブとのEメール交換、外国サイトからの情報収集等、コンピュータを利用した英語教育を行なっている。

「英語スピーキング」

全クラス、ネイティブスピーカーが担当。特に「話す」に重点を置く。楽しく英語の雰囲気になれることにも留意している。

「英米文学講読」

英あるいは米の文学テキストを購読し、作家の文体等を味わう、と共に、作家の人生観等を考える。

春、秋、週1日の授業で、半期で1単位が認定される。旧カリ時には、「週2日の授業では、特に、専門性の高い授業では、予習・復習が間に合わない。」や「2年生の半期で英語と別れるの、どうか?」などの批判をしばしば学生から聞かされた。

「英語スピーキング」を除いて、春、秋、それぞれ、別な種類の授業を履習することが可能で、学生の選択の幅がさらに広がる、と共に、多くの種類の授業の履習が可能になった。

また、「専門選択科目単位充当規定」によって、3年になって、就職準備等を目的とした受講も容易である。

尚、出講日が1日でもよく、非常勤講師の獲得が容易になり、広く一般社会で活躍している人物をも採用し易くなった。

ところで、各種類の授業をいくつ設けるかは、2003年6月に、全一年生を対象に行なった、「2年生英語クラス決定のためのアンケート」によった。7種類の英語のうち希望するものを、第3志望まで書かせた。第1志望を3点、第2志望を2点、第3志望を1点とし、それぞれの授業の総得点を出し、それと、第1志望として選んだ人数を勘案し、クラス数を決定した。広報学科学生の志望順は、「時事英語」「総合英語」「英語スピーキング」「インターネット英語」「ビジネス英語」「英米文学講読」「科学技術英語」であった。経営情報学科については、「総合英語」「時事英語」「インターネット英語」「ビジネス英語」「英語スピーキング」「英米文学講読」「科学技術英語」であった。情報システム学科については、「インターネット英語」「総合英語」「時事英語」「ビジネス英語」「英語スピーキング」「科学技術英語」「英米文学講読」であった。

おわりに

英語以外の情報学部専任教員のみならず、情報学部学生の意見を十分参考にさせていただき、2003年4月からの新カリキュラムが完成した。始まったばかりであり、今のところ目立った批判等はない。今後、新カリに対する数多くの意見を聴取し、次回のカリキュラム改定の際に生かさせていただきたい。

しかし、さらに重要な点は、学生に「ヤル気」をもたせることである。つまり、英語の

重要性を認識させ、学習活動へと転換させる「動機づけ」である。これは、英語の教員だけでできるものではない。他の専門の先生方にも、折に触れ、現代社会における英語の重要性を学生に強調していただきたいと思っている。また、英語に頻繁に学生が触れられる、さらなる環境づくりをして下さるよう、大学にもお願いしたい。

さて、現在、情報学部語学教育委員会では、英語の非常勤講師の採用に関して、「英語」「英語」については、他大学で非常勤講師をしている元高校教員や、特に、文法指導に長けた人物を採用している。また、2年次の選択必修の英語については、学究肌というよりむしろ、朝日新聞、JTB、IBM、ソニー等、広く、一般社会で、英語に関わって活躍したか、あるいは、活躍している人物を採用している。英語のみならず、「日本語による適切な表現能力の向上」、「実社会における円満な対人関係のもち方」などの課題に留意したためである。

最後に、情報学部のすべての英語の授業においては、奨学金などのことを考慮し、成績評価の配分を決め、相対評価にしていることをつけ加えておく。

(注1) 矢口堅三「英語新カリキュラムについて」

『文教大学教育研究所紀要』第5号、1996、PP. 117 - 120

(注2) 旧カリでは、広報学科は3クラスであった。

(注3) 学科によって時限が異なるので、最低2学科の専門英語講読入門指導をしなくてはならなかった。

(注4) 情報学部語学教育委員会では、すでに、2001年1月から、英語教育と平行して、「日本語による表現能力の向上」の指導を行なうことを考えていた。